花の宿り

笹目いく子

ALPHAPOLIS

一

やわらかな朝の風に、海が香った。江戸湊から吹き寄せてきたのに違いない。

どこか甘く感じられるその風を喘ぐように吸い込みながら、市川和馬は懸命に歩を運んでいる。

摂津尼崎の上屋敷を後にしてから、まだいくらも経っていない。だのに、もう半日も歩き続けている心地がした。一面青く染まった鉄砲洲は水底のように静まり返り、己の荒い呼吸と重い足音ばかりが耳につく。

気づけば東の空がじんわりと白み、生あたたかい夏の短夜が明けようとしていた。あえかな光は次第に橙色を帯び、右手をたゆたう築地川の川面が目覚めたようにきらめき出す。頬に触れる真新しい朝日はすでに熱を孕んでいて、ほどなく烈日となって地を焦がすだろうと予感させた。

輝くばかりの夏の日が、始まろうとしている。

——歩け。

鈍りがちな足を叱咤する。まだ塞がっていない胸の刀傷が、一歩歩くごとに気の遠くなる痛みを訴える。当年二十三の鍛えられた体は、常ならば疲れを知らぬ。しかし自慢の鉄脚は覚束ず、視界は揺らいで定まらない。

「市川。裏切り者」

耳元で囁く声に凍りついた。

息を殺して周囲をうかがう。武家屋敷が並ぶ薄青く染まった通りに人気はなく、辻番の灯りがまばらに見えるばかりだ。

幻だ。失血と熱のせいでありもしない声を聞いたのだ。強く頭を振り、気力を振り絞って足を踏み出す。途端、和馬は汗に濡れた喉を引き攣らせた。

夜の名残が凝集したような青い人影が、いつの間にか行く手に立ち塞がっている。ひたひたと和馬目指して近づいてくる。

汗が染みて霞む目を必死に凝らし、今度は幻ではないと慄然として覚った。と、うなじにひりつくものを感じ、ぎくりとする。別の気配が背後にあった。肩越しに見れば、もう一つの青黒い影が音もなく迫っている。

「追うな。もう、捨て置け」

和馬の哀願に、小袖袴に菅笠を目深に被った侍たちは沈黙で答える。右手には築地川、左手には武家屋敷の白壁。橋向こうの辻番からは死角になる場所だ。襲撃されるとしたらここかもしれないという一抹の不安があった。

だが、黙って行かせてくれることを祈っていた。いかに市川家が家中の憎悪を集めていようとも、つい三日前に父の葬儀があったばかりではないか。せめてそのくらいの情けはかけてくれるはずだと、まだどこかで信じていた。

黒羽織の裾を握り締める。蝉の翅のごとく薄く美しい、父の形見の紗の羽織だ。それが手の中で無力にひしゃげた。食い縛る奥歯が軋み、拳が震え、突如視界が白熱する。怒り。すべての感情が怒りへと収斂していく。

前方の見上げるばかりの大男が走り出し、抜き放った白刃を頭上に振りかざす。同時に背後のもう一人が抜き打ちに斬り上げる気配を察した。

憤怒が苦痛を凌駕する。叩きつけられる殺意に呼応して、抜刀しようとしたその時。何かに手を掴まれたかのように、柄を握った右手が止まった。

打ち落とされる斬撃の樋鳴りを聞く。だが、和馬は草木のごとく佇立して動かない。

一瞬前に憤怒の炎を燃え立たせていた目から、表情が掻き消えた。

「うっ」

「何……」

すれ違って駆け抜けた侍たちが慌てて振り返った。今の今までそこにいた青年の姿が、忽然と掻き消えているではないか。どこへ、と狼狽え、数歩動いた場所に立つ和馬を見て瞠目する。

前後から挟み撃ちにすれば、刀が打ち合わぬよう無意識に踏み込みが浅くなる。互いの息もわずかにずれる。その糸のごとき間隙を捉えるや、和馬は風に吹かれる柳のように体を靡かせ、二刀の間をすり抜けていた。

神がかった身ごなしに唖然とする大男へ、つ、と猿臂を伸ばし襟を掴む。滑らかな動きで引き手を取る。羽織を翻し一気に体を沈めた。明らんでいく空を背負って宙を飛んだ大男が、地響きを立てて落下する。それをもう一人が唖然と眺めている。

傷から新たな血が流れ出すのを感じながら、和馬はその男目がけて地を蹴った。苦痛が体を炙っている。燃えるように熱い耳を、先ほどよりも強い風が撫でていく。裂帛の気合とともに拳を固めた時、誘うように、また海が香った気がした。

ちゃぷ、ちゃぷ、という水音が耳をくすぐる。

……雨だろうか。

侘助が、花が散ってしまう。暗く虚ろな意識の隅で、和馬は嘆いている。どうか散ってくれるな。花が散って木が枯れたら、もう何もない。俺の庭には、もう草の一本も残ってはいないのだ……

「お侍さん。もし、お侍さん」

頭の上で野太い声が響いた。

「気づいたみたいだ。幸蔵、六兵衛、手ぇ貸してくれ。そうっとな」

へぇ、と幾つかの声が応じる。

「もうあと一息ですよ、旦那。すぐに医者を呼びますんで、お気を確かに」

医者と聞いた和馬の眼前に、一人の男の姿がぼんやり浮かんだ。剃髪と姿勢のよい細身の体、澄んだ瞳と穏やかな表情は清らかな僧侶を思わせる。和馬が感謝と敬意を寄せてやまぬ医者の姿だ。

父を死へと追いやった男だ。

――朝倉立庵。

一瞬で血が沸騰し、和馬は言葉にならぬ憤怒の声を上げた。

「旦那、暴れちゃいけねぇ。ひでぇ血なんですよ」

「お助けしようとしてるんで。聞こえますか」

狼狽した声が惑乱する頭に染み込み、和馬はようやくもがくのをやめた。傷の痛みに襲われながら、重たい瞼を薄く開く。途端、光が洪水のように溢れて目が眩んだ。体が頼りなく揺れている気がする。弱々しく瞬きを繰り返した和馬は、足元を見て唖然とした。いつの間にか、柳葉に似た形の小舟に乗せられている。

舟は小さな船着き場に寄せてあり、数人の男衆が乗り込んでいた。傍らには、片膝をついて和馬の右脇を支える尻端折りの男の姿がある。日に焼けた精悍な顔と熊のごとき体格にぎょっとするが、和馬をうかがう黒目の大きな双眸には親しみやすく朗らかな色があった。和馬の左脇を支えているのは、浅黒い肌に頬被りをし、屋号が入った半纏を纏った鋭い目の初老の男だ。ひょろりとして見えるのに和馬を支える腕は意外なほど力強い。さらに、目の前には長着に前掛けをつけた赤ら顔の男がいて、おろおろとこちらを見ている。

「持ち上げますよ。傷が痛むでしょうが、少しばかりご辛抱を」

大男がそう言うなり、男衆が、それ、と掛け声を上げた。体が持ち上げられ、紺碧の空と、荷や人を乗せた舟が盛んに行き交う掘割、それから両岸に櫛比する町屋の景色が目に飛び込んできた。

「旦那さん、そんな奴店に入れちゃ駄目です。破落戸なんて助けるこたありません」

男衆の手を借りながら船着き場の板の上を進んでいると、甲高い声が響き渡った。前髪立ちの頭にお仕着せを着て前掛けをつけた十二、三の少年が、船着き場の袂に仁王立ちしている。

「草太、こちらはお武家様だ。破落戸なんぞじゃない」

大男が落ち着いた声音で応じ、そうだ、と隣の赤ら顔の男が続ける。

「謙安先生を捜しに行ってこい。さっきお嬢さんを診てお帰りになったところだから、まだその辺にいなさるはずだ」

「だけど、父ちゃん。久次郎の仲間かもしれないじゃないか。破落戸同士で斬り合ったんだ。俺、嫌だ」

「これ、草太」

地団太を踏む少年を遮って、腹に響く女の声が飛んできた。通りを挟んだ店の暖簾が跳ね上がったかと思うと、どっしりとした腹まわりの女が現れ、あっという間に少年の後ろ襟を掴む。

「旦那さんになんて口をきくんだい。無駄口叩いてないでさっさとお行き」

「でも、母ちゃん」

「でもじゃない。きりきり働きな」

女の迫力に、少年が勢いを失う。草太というらしい少年は和馬をぎろりと睨みつけ、身を翻すなりやけ糞のように走り去った。

少年の剣幕を不思議に思う間もなく、人で賑わう通りを横切り暖簾の内へと運び込まれた。こぢんまりとした土間と帳場らしき小上がりが見え、右手には二階へ上がる階段、台所へ続くらしき暖簾、奥へと延びる廊下がある。その廊下に、女が一人姿を見せた。

「父さん」

と細く涼しげな声で大男に呼びかける。小走りに向かってくるその女の白い肌と淡い紅色の着物とが、廊下の薄闇に浮かび上がった。明るい表から暗い町屋の内に入ったせいで顔がよく見えない。赤い鹿の子の手絡で飾った髪や、鴇浅葱色の着物からして、若い娘らしい。

「お客さんが大怪我なさったって、何があったの」

「話は後だ。布団を頼む、理江。寝かして差し上げろ」

ええ、と言いながら和馬に顔を向けた娘が、鋭く息を呑む。和馬の胸のあたりを凝視しているのを感じて視線を下げると、着物の胸元が赤黒い血に染まっていた。娘が怯えるわけだ、とぼんやり思う。

「もう敷いてあります。さ、こちらへ」

気を取り直した娘に先導され、和馬はどやどやと男衆に運ばれていった。小上がりの奥にある畳部屋に入り、敷かれた布団に下ろされる。羽織を脱ぎ、力の失せた手で腰の打刀を外した。ようやく目が慣れてくると、箪笥と文机などがある八畳ほどの部屋だと知れた。

「ここは、どこだろうか。そこもとらは……」

うまく回らない舌で尋ねると、布団脇に座った大男がにこりと微笑んだ。

「ここは『青波屋』っていう佐賀町の船宿でございまして、俺は店主の熊吉と申します。これは料理人の六兵衛、あれは船頭の幸蔵、ちまいのは小僧の草太……六兵衛とさっきのお京っていう女中の子です。それから、あれは俺の娘で理江と申します」

ひょろりとした男とともに部屋を出ていく若い娘を指して言う。

「船宿……」

先ほどの舟と日に焼けた逞しい男衆はそういうわけか、と得心がいった。

明和の世に入ってからというもの、江戸には船宿が雨後の筍のように増えた。客の求めに応じて猪牙舟や屋根船を仕立てる他に、一杯やれる料理屋も兼ねていることが多い。遊里の客や遊女もよく利用するため、今や出合茶屋まがいのことをする店も

あると聞く。ことに江戸屈指の岡場所を抱え、水路が四通八達している深川には、佐賀町を中心に船宿がずらりと軒を連ねているそうだ。とはいえ、和馬はこれまで船宿に足を踏み入れたことはおろか、佐賀町を訪れたこともなかった。

「旦那はどこぞのご家中で。失礼ですが、お名前をうかがっても」

「津田、和彦と申す。主家はない」

咄嗟に母方の姓を名乗り、名をでっちあげた。津田様で、と熊吉が一つ頷く。

「今朝、小田原河岸にお客を送ったところに、旦那が歩いていらしたんですよ。覚えておいでですか。そのお姿がもう今にも倒れちまいそうで、声をおかけしたんです」

そう聞いた途端、

「お侍様、ひどいお顔色だが、大丈夫なんで」

と呼びかける男の声が耳の奥に蘇った。

和馬は尼崎桜井松平家上屋敷を後にし、襲ってきた藩士二人を伸した後、舟を使おうと南小田原町へ向かって進んでいたのだ。

築地川を挟んだ対岸に、築地本願寺の長大な白壁と青い屋根が聳えている。頭上には鴎が飛び交い、江戸湊に入津した廻船の荷を満載した荷足舟が次々と河岸に寄せられる。和馬は霞みかけた目でその景色を見ていた。

「そうしたら深川へ行くとおっしゃるんで、じゃあお送りしますよと申し上げたんです。ところが、どうにか舟に乗っていらしたはいいが、大川に出たところで前後不覚になってしまわれて。胸に大怪我をなさってるご様子だし、ここへお連れしたんです」

「そうであったのか。造作をかけた……」

そこまで言うと、はっとして懐を探った。袱紗に包んだ荷物がない。

「お荷物なら、こちらに」

熊吉が、顔色を読み取ったように包みを差し出した。

「懐から落ちそうでしたもんで、お預かりしました。ご無礼お許しくださいまし。ご位牌も傷ついちゃおりませんから、ご心配には及びません」

「世話になった」

気が緩んで体の力が抜けた。袱紗には、両親の位牌と、父の辞世の句を記した短冊、それに少しの金子と薬包を収めた道中財布が包んであった。上屋敷の役宅から持ち出したのはそれだけだ。……いや、もう一つあったか。

袂から懐紙の包みを取り出した。そっと開くと、艶やかな二枚の緑葉をつけた小枝が現れる。折れも曲がりもしていないのを確かめ、和馬は密かに安堵した。

「おや、椿ですか」
園芸好きなのか、六兵衛が興味を引かれた顔で尋ねる。
「ああ……侘助だ」
「風流ですな。挿し穂になさるんで」
黙り込む和馬を見て料理人が首を傾げたところに、幸蔵と理江が晒だの浴衣だのを抱えて戻ってきた。
「理江、お前はもういい。休んでいろ」
それを受け取りながら熊吉が小声で言う。
「さっき先生に診ていただいたんだから大丈夫よ。父さんのこの浴衣はまだ新しいでしょう、使っていただいて。晒と手ぬぐい、これで足りるかしら」
落ち着いた様子で応じる娘に、理江、と男が眉根を寄せる。
なんの話だろうか。気息奄々としながら、和馬は娘の様子に目を凝らした。途端、覚醒した心地になる。装いからして二十になるかどうかというところか。はちきれんばかりの若さに溢れた年の頃のはずだ。それなのに、娘の抜けるように白い肌や、うなじや手首の細さときたら、今にも消えてしまいそうに頼りない。
病んでいる、とたちどころに覚る。どこか病んでいるのに違いない。尋常ではない

肌の白さと、今にも空気に溶けてしまいそうな風情が、病弱だった母を思い出させる。己も弱っているせいか、母に似た雰囲気の娘を見ただけでひどく心が波立った。
「津田様は、深川にお待ちのお方がおられるのではございませんか。よろしければ、手前がお知らせして参りましょうか」
熊吉が問う。
「心遣い痛み入る。伊沢町に家があるのだが」
伊沢町、と熊吉は合点がいったように頷いた。
「さようでしたか、それで舟を。では、ひとっ走りご家人へお知らせしましょうか」
和馬は暫時口籠もった。
「いや……家は空家なのだ。誰もおらぬ。待っている者もいない」
顔を見合わせる皆の間に、困惑交じりのぎこちない沈黙が広がっていく。家人もおらず、供もなく、金創らしき傷を負った若侍。軽はずみに果たし合いでもした挙句家族から見放されたか、はたまた凶状持ちが御用の筋に追われているのか、どちらにせよろくなものではないと思っていることだろう。逆の立場であれば、和馬もそう疑うはずだ。
熊吉は和馬を眺めて何事か考え込んでいたが、やがて穏やかに口を開いた。

「さようでしたか。まぁ、これも何かのご縁ってもんです。こんな汚いところでよろしけりゃ、ゆっくり養生なすってくださいまし」
「いや、気遣いは無用だ。少し休ませてもらえば、動ける。伊沢町へ参る」
「そうおっしゃらずに。行き届きませんがね、これでも飯が美味いって評判ですし。この六兵衛は腕っこきの料理人でございまして」
赤ら顔の料理人を指して人懐こく微笑む。そうなさいまし、と六兵衛が頷き、幸蔵も理江も控えめな笑みを浮かべて見せる。素朴な善意に満ちた、屈託のない、心底人のよさそうな顔が並んでいる。
――俺が名を偽っていると知れたら。市川家が桜井松平家家中、いや尼崎の士庶からどれほど憎まれているか耳にしたなら、どんな表情をするのだろうか。
頭を過った考えに体が冷え、目の前が暗くなった。尼崎で起きた大事は藩の外にも知れ渡っていることだろう。江戸留守居役の悪評も、同じく。
己が薄汚い鼠になったかのようだ。日の当たる世界にもう居場所などない。罪人と大差ない、後ろ暗い人間なのだ。そう覚った途端、喉を締め上げられたように息苦しくなった。
「旦那さん、謙安先生をお連れしました。先生、どうぞ」

幾つかの足音が近づいたかと思うと、先ほどの女中が唐紙を開いて現れた。女は、慈姑頭に白いものが交じった小柄な医者を導き入れる。
「おお、先生。呼び戻したりして申し訳ないことで」
「お医者なんぞいりませんっ」
熊吉が言うのを遮って、草太が女中を押しのけ叫ぶ。
「面倒見るのなんてぜったい嫌だ。薬礼だって高直なのに。盗賊とか、辻斬りとかかもしれません。仲間が来たりして……」
少年の声が耳に刺さった。そんなものと一緒にするな、などと言える身ではないのだと体が凍る心地がする。
「くだらないことを言ってんじゃないよ。さっさと仕事にお戻り」
女中が草太の尻をはたいて追い立てていくや否や、料理人の六兵衛が頭を下げた。
「あいつめ、とんでもねぇことを言いやがって。旦那、どうぞご勘弁くださいまし」
「詫びることなどない。子供であれば、血を見て取り乱すのも無理もなかろう」
動揺を押し殺して和馬が応じると、一同は否定も肯定もせずただかしこまった。取り乱したわけではない、とでも言いたげな様子に、どこか引っかかるものを覚える。
「お怪我を拝見しましょう。私は小野謙安と申します。ひどい出血だが金創です

かな」

医者が布団の脇で診察の支度を始めながら問うので、和馬は硬い表情で身構えた。

「治療は結構だ。放っておいてもらいたい」

「何をおっしゃいます。この出血で放っておけるものですか。そうでなくとも膿んだら命取りになりますよ」

和馬の正気を疑うように謙安が目を剝く。

「そうですとも。先生は深川じゃ知らない人はない名医なんですよ。安心なすってくださいい」

熊吉も身を乗り出す。和馬は体を強張らせ唇を引き結んだ。皆が注いでくる心配げな視線が心に重く感じられてならぬ。俺はそのように案じられるに値する人間ではないのだ、という言葉が喉元まで込み上げる。

「……わかった」

低く言うと皆の表情が緩み、ほっとした空気が部屋に広がった。和馬の打刀と脇差を六兵衛が受け取り、慎重に刀掛けへと運んでいく。謙安が和馬に横になるよう促すと、理江が静かに立ち上がった。

去っていく娘の着物の裾が翻り、のぞいた細く白い足首が和馬の目を射る。娘の起

こしたかすかな風が、芳しく甘い香りを運んできた。鬢つけ油か匂袋だろうか。儚く可憐な花を思わせる香りが、なぜか心をざわつかせてならなかった。

市川家の侘助の木が、あまたの花を咲かせている。

役宅の門脇にあるこの木は、父が忙しい合間を縫って世話する珍種で、侘助には稀な八重の花が咲く。噂を聞きつけた藩の内外の好事家が、枝を分けてくれと折に触れて訪れる、市川家自慢の花だった。

その年の花はことに見事で、深まる秋の景色に彩りを添えるさまを見た人は、当たり年だと盛んに言った。

父が丹精し、母が愛でた。市川家の悲しみを見詰め続けた木だった。

――俺は夢を見ているのだ。

頭のどこかでそう覚りながら、和馬は冷たく乾いた風に吹かれて紅の花に見入っている。かすかな足音が聞こえる。和馬は音の方へと視線を向けた。

こちらに気づかず門を出ていこうとしている男がいる。薬箱を手にし、羽織袴を纏った剃髪の医者だ。

「朝倉どの、しばし」

二十歳の和馬は声を上げ、弾かれたように男を追った。地面を覆う赤や黄色の落ち葉が草履の下でかさかさと鳴る。

「お引き止めして申し訳ないが、少し、よろしいだろうか」

はらはらと舞う色とりどりの葉を透かし、足を止めて振り返った朝倉立庵が、返事の代わりに腰を屈めた。

「診立てはいかがだろうか」

庭木の陰に佇んで、和馬は前置きも早々に切り出した。

「朝倉どのの手当てのお陰で、母はここ数日ずいぶんと加減がいい。浮腫も嘘のように引いて、食欲も増した。胸苦しさも軽くなった。朝倉どのの薬はまこと大したものと、皆喜んでいるのだ。この様子であれば、あるいは……」

木枯らしが紅葉を散らし、火照った顔に吹きつける。抑えようとしても声に期待が滲み出た。もう母の命に望みはないと、どの医者からも告げられている。だが、もしかしたら。一縷の望みに縋るように、そう願わずにはいられなかった。

「和馬どの」

目元にまだ青年らしさを残した医者は、何か言いかけて言葉を切る。

朝倉立庵は摂津尼崎藩主である松平遠江守忠名公に仕える侍医で、和馬の母の容

態を耳にした忠名公が直々に差し向けてくれた。三十にして非凡な医術と調薬の腕を持つと言われる朝倉は、上背のある和馬よりも少し小柄だが、すらりとした佇まいに、修行僧のような清廉な雰囲気を漂わせている。眉目鋭い和馬の面立ちとは異なり、やわらかな形の眉と澄んだ双眸が印象的だった。

もう七日も市川家に泊まり込んでいたせいで、朝倉の顎には無精髭が目立ち、目は赤く充血している。今も御殿の詰所へ薬種を補充しに出向き、着物を替えた後、すぐに母のもとに戻ってくるはずだった。

「今は薬が奏功しております。しかし、いつまでこの状態が続くかは、わかりませぬ」

風の音が遠ざかる。細く立ち上る二人の白い呼気が、沈黙を儚く撫でて消えていく。

「――さようか。駄目か」

乾いた唇をようよう動かし呟くと、和馬は虚ろな目で侘助の木を振り返った。

もう母自身の足でこの花を見に出ることは叶わないのだ。それがどうしようもなく不可解なことに思われる。人が死ぬ。昨日は確かにそこにいた人が、今日にはいない。たった一言さえも交わすことはできない。影さえ見つけることは叶わない。そのなんと唐突で、無慈悲なことか。

「それは……」
朝倉が言葉を探す。その時、背後の玄関土間から賑やかな声が響いてきた。
「旦那様、お足元を確かに」
「風が冷たくはございませぬか。温石はあたたこうございますか」
何事かと振り返れば、家士や女中たち、そして父である市川伊右衛門が現れる。
父は何やら大きなものを背に負っている。目を凝らした和馬は、驚倒しかけた。
「父上、母上……何をなさっておられるので」
寝間着の上に夜着を被って、母・園が父に負ぶさっているのだ。
「おや、朝倉どの。和馬までそんなところに」
白い頬にかすかに血の気を上らせた母が、くっきりとした両目を見開いた。
「もう御殿へお帰りだとばかり。いや、みっともないところを……」
そう言った父が、混乱する和馬に照れ臭そうな顔を向ける。
「侘助を見たいと申すのでな。今日は気分がよいゆえ、己の足で歩けそうだなどと言う。目を離すと床を抜け出しかねんからの。お陰で私が背負う羽目になった」
「またまた。負ぶってやろうと仰せになったは旦那様にございましょう。さすが連理の枝のごときお二方におられますれば、それがし、すっかり当てられておりまする」

古参の家士である鈴谷源右衛門が、恵比寿顔を綻ばせて言う。呆気に取られている息子を見て、母もくすりと笑う。浮腫の失せた瞼が開き、朗らかな黒い瞳が和馬をしっかりと捉える。その笑顔のやわらかさに胸が軋んだ。
あの顔色のよさはどうだ。あれほど土気色をしていたのが嘘のようだ。浮腫みが取れてすんなりと細くなった手首の具合も。つい数日前までは息をすることにすら往生していたではないか。こんなにも、よくなった。よくなったというのに。
「朝倉どのには叱られるであろうな。これは、したり」
伊右衛門が目尻に細かな皺を寄せ、悪戯がばれた小僧のように言う。摂津尼崎の江戸留守居役を務める父は、多忙を極める立場にありながらも病身の妻を手ずから世話すると言って聞かず、朝倉同様窶れきっていた。
その朝倉が、和馬の傍らで柔和な笑みを浮かべる。
「滅相もございませぬ、市川様。ご気力が戻られたのはまこと慶ばしいことにございますれば。ぜひにお望みを叶えて差し上げてくださいませ」
「お聞きになりましたか、旦那様。では明日も、こうして連れ出してくださいまし」
我が意を得たりと母が言うので、父が目を剥く。
「何、また運べと申すのか。私の腰が立たなくなるわ」

皆がどっと笑い声を上げた。澄んで乾いた秋の日差しに、皆の和やかな顔が白く光って見える。その景色が、込み上げる熱いものでぼやけた。

「明日は、私がお運びいたしましょう、母上。何時でもお付き合い申し上げますぞ。何しろ鍛えてございますからな」

気づけば、和馬はそう声を張っていた。

「おお、頼もしいのう」

「では、私はその次だ。春になれば、桃も桜も見せてやろうほどに」

無邪気に破顔する母に、父が負けじと言う。

「まぁ。それは……叶うものなら、見とうございますなぁ」

母の白い顔に滲んだ淡い笑みが、和馬の胸を鋭く抉る。父に一番近い、しかし父からは決して見えぬところで、母が一瞬泣いた気がする。

「できるとも。できぬとどうして言えようか。先のことなど誰にもわからぬ。のう、そうではないか」

抗えぬものに抗おうとするかのように、誰に問うでもなく父が言った。

しんとその場が静まり返る。その通りです、と言いかけて舌が固まった。源右衛門や女中らの、今にも泣き出しそうな顔がいたたまれない。絶望が、冷たく黒い水のようにじわじわと胸を侵食する。望みとぬくもりを削り取るかのごとく、じわじわと。

「恐れながら、市川様」

和馬はびくりと肩を震わせ、隣の朝倉に顔を向けた。

「医者にわかることなぞ、たかが知れております。人の生死はいかなる名医の手当てさえも及ばぬところにあると、思い知らされることが多くございます。命とはかくも儚く、しかし底知れぬ力に満ちたものだと悟るばかりです。先のことは賢人にさえ見通すことは叶いませぬ。まして、人の命の明日など……一体、誰にわかりましょうか……」

朝倉は訥々と、しかし何かに突き動かされるかのごとく、一心に言葉を紡ぐ。

「桃も桜も、望んではならぬわけなぞございましょうか」

囁く声に、火のような、祈りのようなものが満ちていた。

光など見えぬ暗闇であろうと、望みがないことなど百も承知であろうと、まだ見ぬ明日がある限り歩くのだ。母を見詰める医者の横顔が雄弁にそう語っている。

息を止めて聞き入っていた父が、やがて顔をくしゃりとさせて微笑んだ。

「かたじけのうござる。かようなお言葉、どれほど力づけられるかわかりませぬ」

我に返った朝倉の頬がさっと強張る。

「差し出たことを申しました。己の非力を棚に上げ、まことに……」
己を頼る患者の前で、無責任とも思われる言葉なぞ口にすべきではなかった——そう激しく悔やむ姿に、母は和んだ目を向けた。
「どうして非力などでおられましょうか。ありがとう存じます。朝倉どの」
深く穏やかな声音で言う母の両目に、澄んだ光が宿っている。
「ほんに、かたじけのうございます」
冴えた風が侘助の枝を揺らす。立ち尽くす朝倉の肩に、淡い秋の日が降り注いでいた。

ふっと開いた目に、見慣れぬ薄暗い天井が映る。
「……もし。お目覚めでいらっしゃいますか」
人影が視界を翳らせた。目を凝らすと、枕元に膝をついた娘がこちらを見下ろしている。確か、理江といったか。そう記憶を辿り、己が青波屋にいることを思い出した。
「今、何刻か。どれくらい、眠っていただろうか」
「六つ（午後六時頃）を過ぎた頃にございます。喉が渇いてはいらっしゃいませんか。朝から何も召し上がっておられませんでしょう。もし、よろしければ……」

斜陽に染まった障子を見やり、そんなに眠っていたかと思っていると、理江が丼を載せた折敷を膝の前に押し出した。丼が、出汁と醤油の匂いがする湯気を立ち上らせている。和馬は表情を消して顔を背けた。
「無用だ。腹は減っておらぬ。すぐに伊沢町へ移るから捨て置いてもらいたい」
えっ、と娘が困惑するのが伝わってくる。
「津田様。失礼ですが、そのお体では……。謙安先生も半月は養生なさらないと、とおっしゃっていました」
懸命な声を聞くも和馬の心は貝のごとく閉じていく。部屋の隅の衣桁にかけられた羽織を見上げたまま黙り込む青年を、理江は途方に暮れたように見下ろしている。
「いいじゃないですか。出ていくって言うなら出てってもらえば」
甲高い声に、和馬は枕の上の頭を動かした。いつの間にか縁側に草太が立っていて、毛を逆立てた猫みたいな風情でこちらを睨んでいる。
「久次郎の仲間だったらどうすんですか。破落戸なんぞ置いとくのはまっぴらだ」
「草太、おやめなさい。無礼ですよ」
「久次郎というのは、何者だ」
ここに運び込まれた時にも耳にした名だ。問いかけた途端、申し合わせたように二

人が黙った。

「以前、ここで船頭をしていた者です」

少しして、理江の歯切れの悪い答えが返ってくる。

「この店に破落戸が居座るなんてご免なんだ。さっさと伊沢町でもどこでも出てってくんな」

火を熾した炭のごとくに顔を真っ赤にして叫ぶ少年を、和馬は物憂げに見上げた。体さえ動くのなら言われなくとも去りたいところだ。それにしても、執拗に和馬へ敵意を向ける少年の心中が改めて疑問に思われた。

「な、何。そんな風に睨んだって謝らないからな。侍なんて怖かねぇ」

「久次郎などという男は知らぬ。その男、船頭だったのだろう。どうして無頼者と徒党を組んだりしているんだ」

少年の目が泳ぐ。和馬が無言で見据えると、やがて観念したように話し始めた。

「三月前、久次郎は悪い仲間と店に押しかけてきて、金と猪牙舟を奪って逃げた。久次郎はお嬢さんに惚れてたんだ。でもお嬢さんにふられて、そしたら旦那さんが邪魔したんだって逆恨みしやがった」

惚れた腫れたなぞわかる年でもなかろうが、草太は大人びた口調でまくし立てる。

傍らの理江がみるみる青ざめ、身の置きどころがないように俯いた。

少年の話をまとめると、つまりはこういうことらしい。十九の年から船頭を務めていた久次郎は、理江に惚れていた。血の気は多いが奉公人からは信頼されていたし、二十六の男盛りでもあった久次郎は、熊吉はいずれ自分に理江を妻合わせるつもりに違いないと思い込んでいた。ところが、いざ理江の気持ちを聞き出してみれば、自分にはまるで気がないとわかり動転したそうだ。

どう口説いても靡かない理江を前にして、男の煩悶は父親である熊吉へと向かった。きっと熊吉が理江によからぬことを吹き込んで、仲を裂こうと目論んだのだ。でなかったら、忠義者で腕のいい自分をどうして跡継ぎにしない。期待させるだけさせておいて、俺を使い捨てにしようという魂胆だったのだ――

暴走した恋心は見当違いの恨みを生み、浪人崩れの破落戸と語らって、大金と店の猪牙舟一艘を盗む暴挙へと走らせた。

店にはもともと屋根船一艘と猪牙舟三艘があったが、折悪しく屋根船を新調したところだった。屋根船の後金にあてる金子をごっそり持ち逃げされた上、猪牙舟一艘を盗まれ、さらには稼ぎ頭の久次郎を失った痛手は大きかった。久次郎を船頭に育てあげた幸蔵は落胆のあまりめっきり衰え、今では店主の熊吉が自ら猪牙舟を漕いでいる

始末だそうだ。

「あいつのせいで店は大変なんだ。なのに、医者を呼んだり飯を食わせたりしてるんだぞ。さっさと出ていけ」

そう言い放った小僧が足音高く縁側に消えた。後には、顔を俯けた理江が残される。井から立ち上る頼りない湯気が、紺青色に沈んでいく部屋に縋(もっ)れながら漂っていた。

傷を負い血を失った体は思った以上に衰弱していて、翌朝になっても身動きが取れなかった。店の皆が勧める薬も飯も頑なに拒み続け、熱にうなされながら昏々(こんこん)と眠り続けた和馬は、物音にふっと目を覚ました。

部屋は薄墨(うすずみ)を流したように暗い。くぐもった話し声や足音、食器の触れ合う音などが天井から降ってくる。和馬があてがわれている部屋の真上には客を上げる座敷があり、賑々しい気配に溢れていた。

放心しながら仰臥(ぎょうが)していた和馬は、つと聞き耳を立てた。座敷の様子が妙だった。客であろう男の尖った声と、それに応じる六兵衛やお京の張り詰めた声がする。やり取りがしばらく続き、不意に客の口調が激昂したものになったかと思うと、がちゃん、と食器がけたたましい音を立てた。

奉公人たちの抑えた悲鳴が響く。和馬はおもむろに起き上がった。畳を踏んで足裏がひやりとする廊下に出たところで、乱れた足音が階段を下りてきた。草太が息せき切って現れたかと思うと、和馬の目の前で真っ青になって喘いでいる。

「どうした。なんの騒ぎだ」

小声で尋ねると少年がはっと瞬きし、血の気の失せた唇をぎこちなく動かした。

「お侍が酔っ払って、お、お嬢さんに遊女の真似事をしろって言うんです。できないって言ったら、怒って。斬るぞって騒いでて。旦那さんも幸蔵さんも、今いなくて」

蒟蒻(こんにゃく)みたいに震える草太の上ずった声を聞くと、理江の今にも掻き消えそうに線の細い姿が目に浮かんだ。和馬は右手で傷を庇いつつ、ゆらりと歩き出した。

「つ、津田様。ちょっと……」

追いかけてくる少年の声を背中に聞きながら、黙々と階段を上っていく。二階には八畳の座敷が一つと、隣に六畳の座敷がもう一つある。小さい方の座敷から客が顔をのぞかせ、何事かと様子をうかがっていた。

「お嬢さんは遊女じゃございません。ご勘弁くださいまし」

六兵衛の必死な声が唐紙越しに聞こえる。

「では遊女を呼べというのだ」
語尾がかすれ気味の、男にしては高い声に、和馬は耳をそばだてた。
「当店は女人のお世話はしておりませんので……」
「船宿ごときが気取りおって。出合茶屋と似たようなものであろうが」
ばりん、と何かが割れる音が響く。きゃあ、と叫んだのはお京だろうか。
声もかけずに唐紙を開き、すっと足を踏み入れた。畳にぶちまけられた酒や料理の匂いが鼻をつく。荒れ果てた部屋の真ん中では羽織袴の男が怒鳴り散らしていたが、こちらの気配に気づき振り向いた。背後で草太がびくりとする。和馬は身構えるでもなく男を眺めた。
尖った鼻と切れ長の目が目立つ顔に、上背のある、がっしりとした体躯をしている。刀に手をかけた男の足元には、袂を踏みつけられて畳に伏した理江の姿があり、二人から少し離れてお京と六兵衛が膝をつき顔を引き攣らせていた。男の背後には中間(ちゅうげん)らしき若い男がいて、旦那様、と弱々しい声を上げ顔色を失っている。
「なんだ、貴様」
侍は和馬の身なりに充血した目を走らせ、無遠慮な声を投げてきた。
「この店で世話になっておる者です。あまりにも騒々しいので何事かと思った次第」

「世話だとぅ」
浪人か、と顔に侮蔑の笑みを浮かべる。
「口を挟まんでもらおうか。誰か知らぬが浪人の出る幕ではないわ」
「そうは申されても、他の客にも迷惑な話。この店では遊女は世話しておらぬのです。そのような用であれば他を当たっていただきたい」
淡々と言いながら近づいていく。男が切れ上がった目尻をさらに吊り上げた。
「貴様に指図される謂(いわ)れなどない。失せろ」
「津田様、ご無理をなさってはいけません。大事はございませんので、どうぞ下へ」
そう言って必死に見上げる理江の顔が、紙のように白い。
「この娘の方が、よほど品性というものを弁(わきま)えておるようだ」
「貴様。野良犬風情が愚弄するか」
和馬のわずかな笑みを含んだ声に、耳まで赤くした男が刀を抜き放とうとする。
あっ、と皆が戦慄すると同時に和馬は滑るように前に出た。
「えっ」
男が動きを止め、訝(いぶか)しげに手元を見下ろした。和馬の右手が刀の柄頭を上から押さえ込んでいる。なんだ、と男がなおも抜刀しようとするが、力んでもいない和馬の右

手はびくともしない。和馬の左手が男の左襟をするりと取った。次の瞬間男の足をぱんと蹴り上げ、担ぐように腰を落とす。男の体が軽々と宙に舞った。受身を取る間もなく音を立てて落下した男は、大の字に転がりぽかんと天井を見上げる。一瞬の出来事に、一同があんぐり口を開けた。

「あまり無体はなさらぬ方がよろしかろう。笠村どの」

静かに口を開いた和馬に、皆の視線が一斉に集まる。

「役を解かれて荒れておられるのはわかるが、恥の上塗りをしてもいいことはありませぬぞ」

男が頭をもたげ、大きく息を呑んだ。

「そこもとは、い、市川どのの……」

「お久しゅうござる」

和馬は唇に苦い笑みを滲ませた。

「このようなところで、何を。市川どのはご逝去なされたと……そこもとは放逐されたと耳にした。一体」

幽霊でも前にしたかのように青くなり、呂律の回らぬ様子で男が言う。

「放逐されたのではございませぬ。御暇をいただいたまで」

和馬は男の顔を覗き込んだ。

「笠村どの、ここは穏便に収めてくださいませぬか。互いに騒ぎを大きくしたい身ではありますまい」

混乱を浮かべた目をうろうろ泳がせた男は、やがてぐっと唇を噛んだ。

「わかった」

のそりと立ち上がり、酔いが覚めた顔で神妙にこちらを見る。

「とんだ醜態をお見せした。そこもととことを構えるほど、俺は命知らずではない。……相変わらず、見事なものだ」

身なりを整え、ばつの悪そうな顔で理江たちを見回してから、懐から掴み出した銭を折敷の上に置く。

「騒がせた」

小声で言って唐紙を引いた笠村の動きが止まった。

「お父上のこと、まことお労しくござった」

と振り返らずに囁いて、今度こそ廊下板を鳴らして消える。階段を下りていく音と、中間が、旦那様、と追っていく声が聞こえ、やがて静かになった。

唐紙を閉じた和馬は、息をするのも忘れた様子の一同を見渡し、座り込んでいる理

江を見下ろした。
「怪我はないか」
「は……はい。あの」
何を言えばいいのかわからぬというように、娘は揺れる瞳を向けてくる。
「あれは笠村吉太夫どのと申されるご仁でな。とあるご家中の留守居役を務めておられた。父を訪ねて幾度か屋敷を訪れたことがあったから、顔を見知っている。律儀なお人柄なのだが女癖が悪く揉め事が絶えぬもので、昨年役を解かれ降格されたと耳にした。吉原や品川の遊廓にも出入りが禁じられたらしくてな、よほど腐っていたのだろう」
まぁ、と唇を丸く開いて理江とお京が顔を見合わせる。
特徴のある高い声を聞いてもしやと思ったが、互いに間の悪い姿を見られたものだ。和馬はそっと嘆息した。
「俺の名は市川和馬という。ゆえあってその名は伏せておきたかった。あんな醜態を晒したからには、笠村どのが再びここに姿を現すことはなかろう。万が一やってきたら、市川はまだここに世話になっていると言うがいい。きっと泡を食って逃げるだろう」

誰も声を発しない静かな部屋を、隣の座敷のざわめきがよそよそしく埋める。
「そこもとは体が弱いのだろう。無茶をするな。こういう時にはすぐに人を呼べ」
血の気が引いて余計に白い理江の顔を、懐かしいような悲しいような心地で見下ろした。娘がまじまじと目を瞠り、初めて会ったかのごとく和馬を見詰める。
和馬は大儀そうに踵を返し、棒立ちになっている草太の脇を通り過ぎて座敷を出た。階下におりて部屋へ戻り、手早く浴衣を脱ぐ。血を落としてもらっていた小袖と袴を乱れ箱から取って身につける。刀掛けの二刀を腰に差して羽織を纏い、あるだけの金子を懐紙に包んで空になった乱れ箱に置いた。最後に侘助の小枝と袱紗の包みを懐に入れて、土間へ向かう。
「津田、いえ市川様、どちらへ」
お京に支えられ、歩くのがやっとの様子で階段を下りてきた理江が声を上げる。
「伊沢町へ移る。世話になった」
「そんな」
「そのお体で無茶ですよ」
理江やお京の声を聞き流して履物に足を入れる。笠村が和馬の所在を方々に触れて回るとも思えないが、顔見知りと出くわした店に長居をする気はなかった。

「市川様っ」
転げるような足音が階段から響き、草太が慌てふためいて追ってくる。
「待ってください。な、なんで。今、出ていかなくたって。死んじまうよ」
「俺がいては迷惑なんだろう」
怪訝な気分で返すと、え、あ、と少年は顔を赤らめ口籠もる。和馬は暖簾を無造作に掻き分けた。明るい店から一歩出るなり、青黒い闇が体を包む。
「市川様。ま、待ってよ……」
「市川様」
取り乱した皆の声を背中に聞きながら歩き出した。
「旦那、起きていいんですかい。こんな時分にどこへ……旦那、もし」
船着き場で屋根船からお客を降ろしていた幸蔵が、訝しげな声を投げてくる。旦那、と繰り返す声が遠ざかる。
暗くなっても通りは賑わい、行き交う人で溢れていた。まだ塞がりきらぬ傷が鈍く痛み、体の芯には嫌な熱が燻っている。ざらつき殺伐としたものだけを瞳に浮かべた和馬は、夏の到来に浮かれさんざめく人々も目に入らぬように、一人、生あたたかい宵闇に消えていった。

二

伊沢町の家は、細い路地のどん詰まりにある、なんの変哲もない小さな二階屋だった。一階に土間と台所と厠、狭い板敷に続く六畳間が一つ、それから梯子階段の上に天井の低い厨子二階がある。家財といえば布団と長持があるくらいで、鍋釜さえない殺風景な家だ。
佐賀町の青波屋を出た和馬の暮らしはみるみる荒んだ。家には父が少々の金子を隠していたが、朝倉立庵の探索のために猪牙舟や町駕籠を乗り回すうちにあっという間に底を突いた。しまった、と思った時には後の祭りだ。市川家では、身分のある家の多くがそうであるように、家政は家臣があずかっていたから、和馬には金銭の感覚というものが身についていない。炊事や洗濯も奉公人の仕事だったので、士分を離れたら最後、まるで暮らしを営む力がなかった。
ならば切り詰めるまでだ。そう決めてまともに食べることもせず、身なりに気を配ることもしなくなった。眠れば悪夢にうなされ、安穏とできる夜さえない。今や餓狼

のような姿に、目ばかりが炯々と光っている。傷は塞がっても体は衰える一方だった。

隣人ははじめこそ物珍しげに声をかけてきたが、他人と交わろうとしない殺伐とした目の浪人に辟易したらしく、今では路地ですれ違ってもそそくさと通り過ぎるばかりだ。

朝倉の行方は杳として知れない。

焦燥と疲労に苛まれたある夕刻、和馬は足を引きずり狭い庭に降りた。

熱く湿った風が体を包む。狂暴な日に晒された土は乾いて、裸足の足裏が焼けるようだ。半ば朦朧として佇む和馬の視線の先には、小さく盛った土に挿した侘助の小枝があった。

かつては、和馬の背丈よりも大きな木の一部であったそれを見下ろしていると、熱い風が熱を失い、凍てつく寒風に変わっていくように錯覚する。隣家の風鈴の音も、棒手振りの声も遠ざかり、周囲は白一色に塗り潰される。額と頬に牡丹雪が触れる。白い息を吐いて立ち尽くす和馬の心は、いつしか、今年の如月の、ある雪の日に戻っていた。

明和六年（一七六九年）の如月は、例年にも増して寒の戻りが厳しかった。

深い涅槃雪が、江戸を白く覆っている。

如月の十二日の午後、霏霏として降りしきる牡丹雪の中、和馬と父・市川伊右衛門は、市川家家士とともに深川の霊巌寺へ母の墓参りに出かけた。

月命日でもなく春彼岸も近い。ただでさえ、摂津尼崎江戸留守居役の父は多忙である。

なぜ、わざわざこのような日に。

不思議に思ったが、父はどうしてもと、静かに、そして頑なに言い張った。

菅笠の陰から見渡す江戸の町は人影乏しく、白く塗り固められたように静まり返り、ざくざくと水気の多い雪を踏む三人の足音ばかりが耳につく。

「よう降りますなぁ」

家士の鈴谷源右衛門が曇天を見上げ、誰に言うともなしに呟いた。

雪と氷柱に覆われた寺門をくぐれば、動くものは舞い散る雪片ばかりとなった。本堂で住職に丁寧に挨拶をしてから墓地に回り、分厚い雪に埋もれた五輪塔の墓を掘り起こしにかかる。尼崎藩主家である桜井松平家の江戸菩提寺はこの霊巌寺である。大方の江戸定府の藩士も藩主家に従い菩提寺を国元から移していて、三年前の冬に病没した母・園もやはりここに葬られていた。

台石とその周囲に積もった濡れ落ち葉や木の枝を取り除き、手が千切れそうなほど冷たい手桶の水に手ぬぐいを浸しては固く絞り、墓石を隅々まで拭き上げていく。かじかんで真っ赤になった両手が痺れてかっかと火照り出す頃には、そこだけ雪が解けたかのように、市川家の黒く濡れた五輪塔が白い世界にぽつんと浮き上がって見えた。

線香を立て、笠を取って墓の前に膝をついた父は、両手を合わせて瞼を閉じる。

和馬と源右衛門もその後ろで父に倣った。雪まじりの冷たい風が、やすりで擦るように耳朶と首筋に吹きつける。しかし、和馬の心は和んでいた。

――久方ぶりに父上がおいでになられて、よろしゅうございましたな、母上。

病みつく前の溌剌とした母の顔が瞼に浮かぶ。日だまりのような笑顔が思い出された途端、心の奥底に埋もれていた痛みが胸に滲み出した。

御殿用人の津田家の末子に生まれ、生来腎が虚弱であった母は、三年前の夏、父が江戸留守居役を拝命した頃から目に見えて衰弱した。秋になり、亡くなるひと月ほど前には高熱や悪寒を発し、ひどい背中の痛みを訴えるようになった。話を耳にした当時の藩主松平忠名公は、わざわざ御殿侍医の朝倉立庵を治療に差し向けてくれた。朝倉の努力で一旦は持ち直した母は、それから半月の後に息を引き取った。つっかえ棒を失った家ががらがらと崩れ落ちるかのように、その死は無慈悲で、暴力的だった。

けれども、和馬にも父にも喪失を嘆く間はなかった。その翌月、藩主忠名公が病により急逝したのである。家中が混乱する中、父は年末から翌年明和四年（一七六七年）の如月まで、嫡男である松平忠告公の家督相続と藩主就任のために奔走した。同じ月には、尊王を唱える一派が処罰された山県大弐の一件に藩が巻き込まれ、半年近くその対処に忙殺されることになった。さらにその年の終わりには、忠告公と正室・吉の嫡男である戌千代君が早逝するという悲劇が家中を襲った。

取り乱すことも、弱音を漏らすこともない父だったが、くすんだ色の顔には頬骨が浮き上がり、常に背筋の伸びた端正な背中は薄くなっていった。心静かに母を悼み、悲しみと折り合いをつける余裕などなかったに違いない。

瞼を開くと、父はまだ手を合わせて目を閉じている。何をそれほどまでに母に語りかけているのだろうかと思うほど、長い祈りだった。

ちらと源右衛門をうかがうと、丸い鼻と頬を赤くした小太りの家士は、白い息を静かに吐きながら目を伏せ気味にして、忍耐強く主を待っている。いつの間にか雪は粉雪に変わり、父の肩の上でちらちらと瞬いていた。まるで母が父に囁きかけているようだ、と柄にもないことを思う。

「では、参ろうか」

ややあって、父の声が肩越しにやわらかく聞こえてきた。

何かがおかしいと感じたのは、翌朝のことだった。

朝餉をともにとった後、これから江戸城へ出向くと告げた父を、和馬は訝しんだ。

「本日、にございますか……」

諸藩の留守居役は、毎月一日、十五日、および二十八日の月次御礼のために登城する藩主に随行するのがならいだ。明後日には登城するというのになぜ今日お城へ、と不審が胸に湧く。

「昨日、切紙が届いた。伊奈備前守様の命にて、本日御殿勘定所へ参上せよとな」

そう切り出した父の声は、奇妙なほどに平らかだった。

伊奈備前守半左衛門は旗本屈指の名家である伊奈家当主であり、関東代官頭を務めると同時に勘定奉行を兼任する人物だ。役職柄誼を結んでいる父が、「才知と情を備えた傑物でおられる」と評するのを耳にしたこともある。

和馬は備前守との面識はないものの、父は年も近いせいか身分を離れて肝胆相照らす仲で、馬喰町に位置する伊奈家の屋敷、通称郡代屋敷に招かれては、備前守と将棋を指したり、武術を指南したりと親しく交わっていた。

「何か、火急の事態が出来したのでございましょうか」

返事はなかった。

父の双眸はどこか遠くを見ているようで、和馬はわけもなくかすかな不安を覚える。

「のう、和馬」

はい、と身を乗り出して父の顔に見入った。凛とした眉目とまっすぐな鼻筋、実直さを表すように引き締まった口元が、和馬とよく似ていると人が言う。今年四十二、まだ男盛りのはずだ。けれどもこの数年で頬の肉は落ち、黒々と豊かだった髪は艶を失い、苦悩を刻むように小皺が増えた。

「市川家は慶長十四年に忠頼公が落命なされ、遠江国浜松の所領を失われた際にも、お家に従い武蔵国へ赴き、忠義をもってお仕えし続けた」

「はい」

和馬は思わず背筋を伸ばす。

遠江浜松五万石の藩主であった松平忠頼は、慶長十四年（一六〇九年）に従弟の水野忠胤の江戸屋敷に招かれた際、同席していた久米左平次と服部半八郎の争いを仲裁しようとして殺害された。善意が裏目に出た上に、忠頼にはなんら落ち度もなかったにもかかわらず、失態に連座させられる形で桜井松平家は改易という悪夢に直面した

のだった。

当時わずか九歳であった嫡男の忠重は、翌慶長十五年、武蔵国深谷にわずかに八千石を拝領する。家臣団の多くは旗下を離れて離散していった。その後、元和八年（一六二二年）、忠重二十一歳の年に上総佐貫に一万五千石を与えられ大名への復帰が許されるまで、幼い当主と残った家臣はともに塗炭の苦しみを嘗めたのだ。

「忠重公と苦難をともにした市川には、お家との強い主従の絆がある。市川家がお家に仕えるのは、給人であるからでも、禄を賜るからでもない。ただお家への無私の敬慕のためだ。たとえ家を失い、士分を失うことがあろうとも、お家をお守りし、二度と改易などという悲劇を繰り返さぬことが市川家の使命であり、誇りであると信じている」

「はい。よく、存じ上げております」

和馬は頬を引き締め、生真面目な表情で応じる。

父は温厚だが口数は少なく、教訓めいたことは滅多に口に上らせぬ人だ。市川は代々馬廻りを務める番方であるが、聡明で人望厚い人物であるのを買われ、前藩主忠名公が逝去する直前、父は請われて江戸留守居役に着任した。それゆえ、父は能吏でありながら武人の清潔さを強く内に持っている。その父がいつになく強い口調で己の矜持を語る姿が、どこか意外に思われた。

「いや、おぬしにはまだわからぬだろう」

伊右衛門の目元がふと緩む。

「ただ、私が言ったことを覚えていてくれれば、それでいい」

そう呟く父の表情は、冬の空のように一点の曇りもなく澄み切っていて、しかしなぜか悲しげだった。

ぴんと張り詰めた空気で満ちた道場に、二つの呼気が細く立ち上っている。

和馬の正面には、道着姿に木剣を手にした平野軍治郎が、微動だにせず安坐していた。

藩の主流である新心流居合術は、柔術・居合・剣術の三つを一体とし、剣と体術を縦横に駆使した実践的な技を使う。この流派は大きく膝を開いて座る独特の座法を取ることでも知られる。左足は尻の下に置き、右足は胡坐をかく。柔術と居合術に適した、安定して合理的な座法だ。

二十四になる軍治郎は鍛えられた長躯の持ち主で、体軸の通った姿勢は惚れ惚れするほど美しい。八つの時に道場で意気投合して以来の幼馴染で、今では和馬とともに

双璧と呼ばれる腕前の男だ。

同様に座した和馬は、深い呼吸を保ちながら丹田に気を溜めていた。

無言の気の競り合いを、稽古を終えた藩士たちが息をひそめて凝視する。

空気がきりきりと密度を増し、白刃を裸足で踏むように研ぎ澄まされていく。互いの体から剣気が音もなく迸り出た刹那、軍治郎の抜き打ちが上段から襲いかかっていた。

即座に鎬で受け流し、間髪を容れずに片手打ちで面を切り下ろす。この時、「飛び違い」という足を前後に踏み替える動作をしている。踏み替えの力が加わることで、斬撃の威力はさらに増す。強烈な一撃を軍治郎が飛燕のごとき敏捷さで飛びすさって避ける。だが、追いすがる和馬の方がわずかに速い。剣が噛み合い、かっ、と鋭い音が立つ。軍治郎が八相に構えた。飛び違いからの面を予期した和馬は、下がるのではなく胴目がけて剣を繰り出す。

鋭い気合とともに踵が床板を激しく鳴らす。

木剣が唸りを立てて空気を裂き――

ぴたり、と静止した。

固唾を呑んで注視していた藩士たちが、一斉にはっと息を吸う。

動きを止めた和馬の喉元に、片手突きで繰り出された軍治郎の切っ先が、一寸ばかりの隙間を残して迫っていた。諸手面と見せかけて片手突きに変える技は、この友人の得意とするところだ。

「参った」

まんまと読み違えたと臍を噛みつつ、和馬はするすると後ろに下がる。

互いに刀を納めて礼をした後、腕で額の汗を拭った。

無様な立ち合いだった。

道場を出ていく藩士たちの、畏怖を浮かべた視線を感じながら唇を歪める。

「他に気を取られておっただろう。だから見誤ったのだ」

「そう思ったか」

壁の刀掛けに木剣を戻しながら、軍治郎のぶっきらぼうな声に嘆息した。早朝に江戸城へ赴いたきり、夕刻になろうというのに戻らぬ父のことが頭から離れずにいる。

「うちで飯でもどうだ。ついでにひとっ風呂浴びていけ」

気を取り直して誘うと、

「いいのか」

と軍治郎が屈託なく応じる。

そうと決まれば急に腹が減ってきた。竹刀と防具を包んだ風呂敷包みを背負って歩きかけたところで、そうだ、と友人を振り返る。

「智成にも声をかけるか。しばらく顔を見ておらんしな」

「今日は神田の私塾のはずだろう」

「そろそろ戻る時分だ。高木家の台所から酒をくすねさせよう」

「お前、その格好であいつの屋敷に寄るつもりか」

軍治郎が呆れ顔をつくった。

二人の竹馬の友である高木智成は、江戸家老を務める大弐を父に持つ。当然住まう役宅も広大で、市川家などとは比べ物にならぬ。だが当年二十五の智成は、そのような家柄に驕ることのない男だった。おまけに剣の筋もいいが恐ろしく頭が切れる。そのため、他の藩士のように外出の制限を課されることなく、江戸府内の儒学や和算の私塾に通うことが許されていた。お陰で、ここ数年は道場からめっきり足が遠のいていた。

「何かまずいか。高木家の家人はこんな姿見慣れているだろう」

「これだからお前は世間知らずだというんだ。俺は軽輩なんだぞ。子供の時分と同じというわけにはいかん」

全身から湯気を立てつつ笑う軍治郎を、和馬は複雑な気分で見遣る。

諸藩の上士にあたる給人の高木家や市川家とは異なり、軍治郎の家は中士の大小姓だ。しかし、三人は家格の違いなぞ気にも留めず、少年の時分から親しく交わってきた。

けれども、それぞれが家督を継ぎ家格に従った役職に就けば、今と同じ付き合いが難しくなるであろうことは、世間知らずの和馬にも予想がついた。上屋敷では顔を合わせることさえ稀になるだろうし、すれ違えば軍治郎が道を譲って頭を下げることになる。つまらぬものだな、と侘しい気分が胸を塞いだ。

「今更だろう。急に分別臭いことを言うな」

低く言って、ぎゅっと板を鳴らし道場の上がり口へ向かう。と、傾きかけた日を遮り、その上がり口に現れた人影があった。

「和馬、軍治郎、おるか」

鋭く呼ぶ声は高木智成のものだ。

「おお、噂をすれば」

軍治郎と顔を見合わせ笑った和馬は、智成を向いて笑いを呑み込んだ。細面に思慮深げな瞳が印象的な友人が、寒風の中に立ち尽くしている。羽織の下で両肩が不規則

立ち読みサンプルはここまで